

熊野 孝文

鹿屋元 40年、2021年10月、堂島コメフリーランスとして取材・執筆活動を行っている。著書に『ブランド米開発競争』(中央論新社)など。

全国米穀工業協同組合(略称全米工)という組織がある。加盟組合員は低品位米の搗精・販売を主業とする業者で、組合員数は101社。大きな全国組織とは言えないが、業界に先駆けて穀粒判別器を使った「コメの画像取引」を始めするなど革新的な取り組みを行っている。また、情報公開にも積極的で毎月、東日本と西日本で行なわれる情報交換会はメディアも参加しているほか、取引会で成約した価格も成約日にオープンにしている。

Bランク米がタイトに コメ政策の弊害が表面化

その全米工が9月22日に東京で開催した東日本ブロック会議の情報告交換会で、二つの興味深い発言があった。一つは「いつの間にかふさおとめやふさがねといったBランク米がなくなつた」(千葉の組合員)。もう一つは「コメ先物市場復活を望む声が強まっている」。

この二つの発言は関係がなさそうに思えるが、実はコメ政策と密接にかかわっている。この関係を明らかにすることによってそれらの要因が22年産米の動向に影響していることがわかる。

新米の収量品質情報提供 全米工東日本ブロック会議

二つの発言の関連性に触れる前に情報交換会では、主要産地で新米の収穫作業が始まり、各地の組合員からその状況が報告されたので、その概要を先に紹介したい。

▼北海道 収穫が始まったばかりだが、天候に恵まれて順調に進んでいる。昨年と比べるとゆめびり

かは反収1俵半ぐらい少ない。昨年は豊作であったので平年に比べるとそれほど収量は少なくない。品質も良い。ななつぼしはこれから収穫が始まるが、引き合いが多い。ただ、価格はホクレンの概算金アップもあつて高値になりそう。

▼宮城 台風14号の影響はほとんどなかった。一部で刈り取りが始まった。早いものは収量も品質も平年並み。カメムシ害、高温障害の影響も見られない。統計の発表の「やや良」という感じ。

▼新潟 ぐず米は1kg60円で始まったが、現在70円程度に値上がり。早生は330匁から340匁程度であったが、コシヒカリは350匁台に乗っており、モノが良い。ただ、昨年よりシラタの青が多い感じ。

▼新潟 早生は少なかった。加工用、飼料用に向けられているものが増えた。魚沼コシヒカリは庭先で1俵2万円という声も聞かれる。餅米は、わたぼうしも加工用に回っている。また、飼料用に使われるぐず米もある。

▼新潟 中蒲原、北蒲原のこしいぶきは品位が落ち、1等は半分ぐらい。ぐず米の発生は若干少ない

が、品位は悪いものではない。酒米の五百万石は、品位は良いが収量は1割から2割落ちている。清酒が復調しているのも酒米の供給量、とくに兵庫の山田錦の出来を心配している。中米は価格が先行して7000円から7500円になっており、主食連動という動きになりつつある。

▼千葉 東葛地区除き刈り取りは終了。作況は平年並みだが、コシヒカリは1等でもモノは良くない。B銘柄はどこに行ったのかわからないがなくなっている。民間の集荷が進まなかったのか、印象としてはふさがね等は半減した感じ。本当に不思議な感じで、いつの間にか終わっていた。海匠、山武地区は品位が良くない。見た目2等。

農水省が8月15日現在の作況を発表した後の情報交換会であったが、例年よく言われる作況指数と実際の感覚のズレを指摘する意見はなかった。特に台風14号の影響に関心が高かったが、直撃された九州でも一部稲の倒伏が見られた程度で大きな被害はなかったという報告が聞かれた。

これらの発言の中で、千葉の組合員の「Bランク米がいつの間

「かなくなつた」という発言に関心を持たれる。早期米産地の千葉県といえどもまだ9月であり、まさに出回り最盛期のはずだが、それが市中で出回るBランク米が薄くなるという現象自体、この組合員でなくとも奇異な感じを受ける。

飼料用米へ用途変更 Bランク米の供給量減少

千葉県内で、市中で取引されるBランク米が薄くなったという情報は集荷組織など複数の関係者から寄せられており、実際に取引される新米の価格はふさおとめとコシヒカリが同値圏内になってしまった。

出回りの少ない特定の銘柄が大口ユーザーから指名買いが入りスポーツ価格が突発的に高値になるケースはままあるが、出回り始めたばかりのBランク米がこれほど早く玉薄になることはない。

そうした現象が起きた最大の原因は、飼料用米へ仕向けられる量が増えたことにある。22年産米の収穫が始まる前から関東の集荷業者の間では業務用米に向けられるBランク米が不足するのではないかと予想されていた。

とくに大規模稲作農家の間では

そうしたBランク米を飼料用に回すケースが増えている。これは全国的な傾向で、農水省がとりまとめた22年産作付け意向調査でもほぼすべての県で飼料用米の作付けが昨年を上回るという結果が出ている。

飼料用米の作付けが多いことで知られる栃木県でも、これまでBランク米として出回って来た「あさひの夢」が減っている。こうしたBランク米の供給量が減って困るのは、中食・外食業界で、これまでコメだけは安く買えると思っていたが、そうならなくなりつつある。

古米は大手卸が独占状態 国と全農の支援でメリット

業務用として使用されるコメは家庭用精米として量販店等で販売される精米と違い、銘柄や年産を表示する必要がなく、20年産や21年産でも使用できる。こうした古米を最も多く在庫しているのは国が制定した周年安定供給対策にエントリーした大手卸である。何せ保管料等の経費は国が税金で賄ってくれるので、来年以降ゆっくりと販売できる。実際にいくらで購入できるのかは明らかにされていないが、一説には60kg当たり8000円台と言われており、在庫リスクを抱える心配はない。

今後の業務用米の販売を考えると22年産Bランク米の価格が上がれば上がるほど、周年安定供給対策の古米在庫を持たない中小卸ほど不利な立場に立たされる。

先行きの価格がわかり誰でも売り買いができる先物市場があればこうした不公平は生まれなかつたはずである。

さらに言えば生産者も先行きの価格がわかる先物市場があれば作付け前から飼料用に販売するか業務用に販売するのか選択ができたはずで、こうしたことから「先物市場復活を求める」声が上がるのも当然のことと言える。

銘柄間格差が消滅する世界 市場を無視した価格が原因

もう一つ重要なことは、市中で取引されるコシヒカリとBランク米の価格が同値圏内になっていることである。

これまでコシヒカリやあきたこまちといった全国銘柄に対して地元だけで生産される地場銘柄では厳然とした価格差があった。また、同じコシヒカリであっても県内の

地区によっても価格差があったのだが、それがなくなりつつある。これは大きな変化で、銘柄信仰により各産地の評価が違ってきていたが、そうした市場評価が形成されなくなるということを意味している。

典型的な例としては各産地が鳴り物入りで育成しているブランド化を目指した新品種で、産地側が一方的に価格を決めている。価格は売り手買い手が参加する市場で決まるはずであるが、そうした意識はまるでない。

仲間業者間で行なわれる席上取引会でまれにそうした新品種が売り物として出てくることもあるが、買い手からは「何それ？」と言われるのがオチである。

当たり前だが、価格は需要と供給のバランスにより市場で決定される。市場を無視した価格を唱えていけば長年苦勞して育種した新品種が市場に出回らないばかりか、いつの間にか姿を消していったということになりかねない。そうした事例は過去にいくらでもあったが、いまだにそうしたプロダクトアウトの発想から抜けきれないことがコメ消費減少の本当の理由だとも言える。